

2018年2月18日

## ナロマイン遠征

Matsu



今回で八回目のナロマイン遠征にあたり以前より考えていた東海関西の学生に本当のソアリングを経験させたく希望者を募り全国大会出場予定選手二名を連れて行く事とした。私自身は3回目のD500km達成を目標として計画していた。

フライト期間は1月29日から2月9日の12日間と今までで最長を計画し、余裕を持ったつもりであったが私の想定不足もあり結果は期待通りではなかった。

今回の気象条件は私の期待通りでなかったが学生にとってはナロマインの様々なサーマルとフライト環境を経験でき全国大会への良い練習になったと思う。

その成果は各人がレポートしてくれると思うのでここでは私自身のパイロットとして、またインストラクターとして得たことを纏めます。

当初二人ともナロマインで飛ぶのにはさほど苦勞せずに済むだろうと考えていた。

しかし、昨年以上に今年のナロマインでは海外からの操縦練習者が多く、毎日複座が3機、単座が4~6機同時間にフライトしていた。

日本でのフライトでは決まった空域を決まった機体が飛び、さらに地上からコントロールされているが、ここでは管制がなく各パイロットが地上も上空も、更に離陸も着陸もコントロールしなくてはならず、二人には大きなストレスがかかっていた。

当初のソアリングを経験させれば良いという考えは初日で飛んでしまった。

そこで、二人を他のトラフィックがあっても安全に飛べる一人前のパイロットにする事が目標となった。

まずは自分で考え、自分で判断できるように指導していく事とし、従来の操縦技術を教え

るインストラクションではなく、問いかけによりその答えを自ら出せるようにしていき何か問題点が見つかれば、原因を一緒に考え、対策を出し結果が出るようにした。もちろん、なかなか結果を出せない事もあるがそれに向かって考えることが重要であり、知識だけでなく体が動けるように指導することでパイロットとして成長できると思う。一人ひとりの性格をよく理解出来ているのがベースになるが、自分自身の成長へも役立つと思い、簡単にインストラクションしそうな気持ちは抑えて辛抱強く話して行った。二人はナロマインを後にする頃には一人前のパイロットに成長してくれた。

二人への指導を通して、私は「安全は全てに優先する」と常に言っているが、本当にそれが出来ているのか、どうすれば安全なのかを実際には分かっていなかったと気づいた。普段の訓練でも運行上の問題や法律の運用等であいまいな点は多々あると思うようになった。

そのような時 Shinzo さんから「危険度＝タスク/経験値」だよとお聞きし成程と思った。



今回の遠征で経験値の少ないパイロットをいきなり見知らぬトラフィックの混み合ったエアフィールドへ入れた事で彼らの危険度を増してしまったと反省している。このような事は普段の訓練でも訓練生への要求を高める事や、競技フライトなのでも増してしまうので、インストラクターは普段から心して指導していかなくてはならない。人間は自分のストレスを感じる事はなかなか出来ないと思う。インストラクターは「危険度＝タスク/経験値」を常に考え指導しなければ最低の安全も確保できないのではないかと思うようになった。今回の遠征にて、多くの事を学ぶことが出来、この経験を今後活かして指導していきたいと思います。

以上